

インスタレーション部門 最優秀賞

タイトル 『明日が最期なら何をしますか ～「平和」を生きる私たち～』

研究代表 山口彩奈（佐々木直美ゼミ）

平成から令和になりました。時代は常に変化しています。しかし、時代の変化と共に忘れてはいけないこともあります。私たち佐々木直美ゼミは“世界遺産に学ぶ”というテーマで研究をしています。その中で負の遺産に焦点を当て、「特攻」という悲しい歴史を世界遺産として人々の記憶に残せないだろうかと考えました。たくさんの特攻隊員が飛び立ち、命を落とした鹿児島には「知覧特攻平和会館」という貴重な資料館があります。この歴史を後世に伝えていくため、知覧特攻平和会館を世界記憶遺産に申請する動きがあることを知りました。この取り組みに賛同し、戦争の記憶を風化させないためにも、現代の若者である私たちが特攻の真実を伝えたいと考え、平和を考え直す機会として特攻隊について研究を進めてきました。

その過程で、法政大学からも特攻隊員として戦地に向かった学生たちがいたこと、私たちと変わらない年代の人たちが特攻で亡くなっていたことを知りました。そこで、より深く特攻隊について学ぶためにも、鹿児島県の知覧にフィールドワークへ行きました。三角兵舎や掩体壕（えんたいごう）など当時の生活や戦時中を思い出させるような遺構で貴重な経験をしました。また、語り部の方からの講話や特攻隊員の遺書などから親子の絆、家族愛を最も強く感じ取ることができました。家族や大切な人に当てた手紙や遺書はどれも前向きな内容であり、悲しませないように、心苦しませないように、喜んで特攻に行って参りますと書かれていました。特攻について学ぶ前は、当時の狂信的、高圧的な雰囲気に着目し、特攻隊員の心理を一括りに考えていた私たちですが、彼らにもいろいろな想いがあり、家族のため、日本のため、将来のため、様々な想いで特攻に向かったことを知りました。

今回の学会では、現在の平和が多く犠牲の上に成り立っていることを認識し、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、現代に生きるありがたさを改めてご来場の方々に実感していただきたいとの思いから、発表内容を検討しました。また、フィールドワークを通して私たちが最も強く感じた、親子の絆、家族愛についてこのインスタレーションを見た方々にも見つめなおすきっかけにしていきたいと考え、当時の写真や遺書、兵器や歴史の説明、特攻・戦争の結果などをインスタレーション形式で提示しました。単なる当時の説明、あるいはフィールドワークの報告ではなく、実際にご来場者自身が考え、感じ、このインスタレーションの前と後で、少しでも心に変化を起し、これから先の選択や行動に移していただけることを今回の学会の目的としました。

#### 参考文献

佐藤早苗（2007）

『特攻の町知覧・最前線基地を彩った日本人の生と死』光人社.

知覧特攻平和会館編（2011）

『いつまでも、いつまでもお元気で：特攻隊員たちが遺した最後の言葉』草思社.

知覧高女なでしこ会編（1996）

『群青：「知覧特攻基地より」』高城書房出版.

法政大学史委員会編（2018）

『学徒出陣証言集』法政大学.

水口文乃（2010）

『知覧からの手紙』新潮文庫.

村永薫編（1991）

『知覧特別攻撃隊 写真・遺書・日記・手紙・記録・名簿』ジャプラン.

<写真出典>

[https://repmart.jp/blog/history/special\\_attack\\_weapon/](https://repmart.jp/blog/history/special_attack_weapon/)

<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/63584>

<https://www.pinterest.jp/pin/791859546955682683/>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%87%E6%B4%8B>